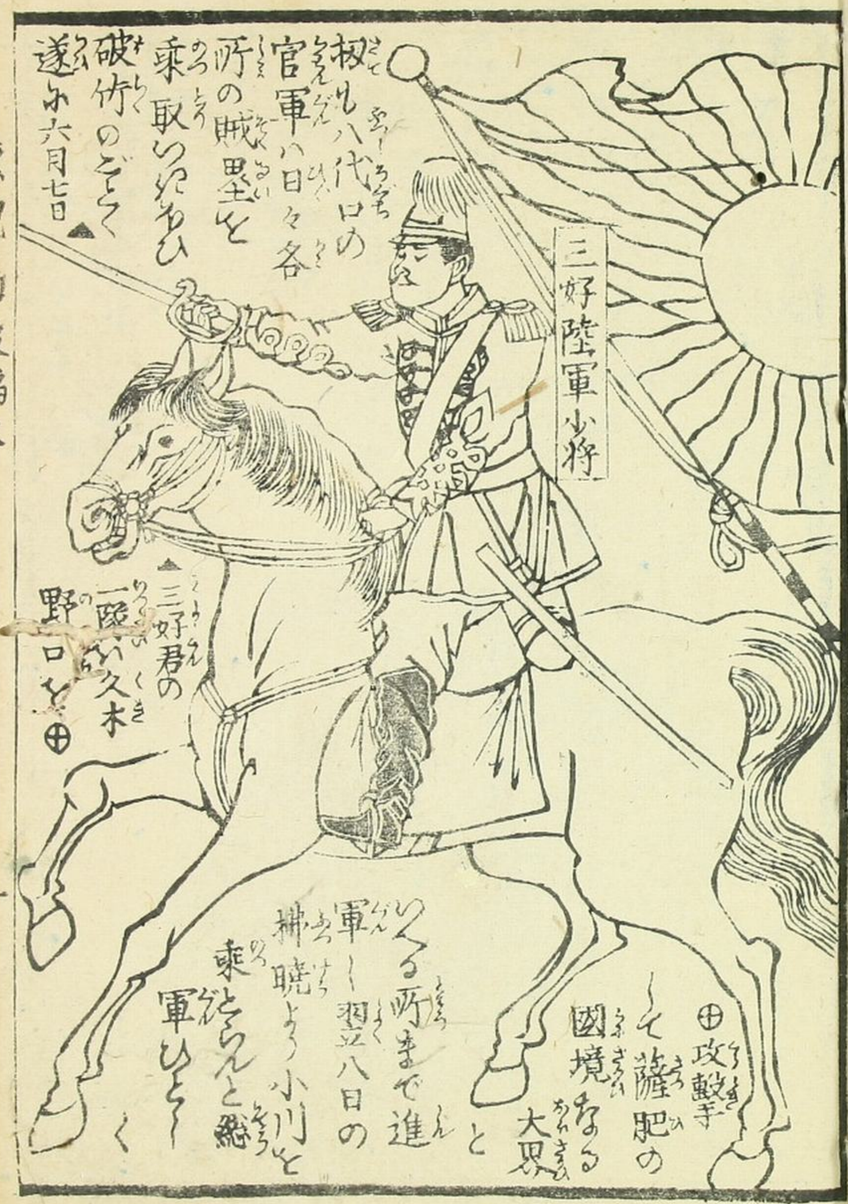
永島福太郎錄
鹿嶋戰記
後編三号
加賀吉板

A485
3

永喬福古齋
永喬孟高画

繪本鹿兒嶋戰記

東京　青盛堂板



48-7899

英氣養ひくるるとあて指令とともに吹立る喇叭の音も高く線出しる一旅團い大野と折うて小川をおして進軍急ぎて同処に到り

▲ 我れ先づ偵候を

敵の拳

薩兵い墨と

ちる

委く引ちめ大口の方へ逃走せし官兵

い一発も

つの銃丸小川を占め即時きんと大口へと向れる

動と探り

ちる

此

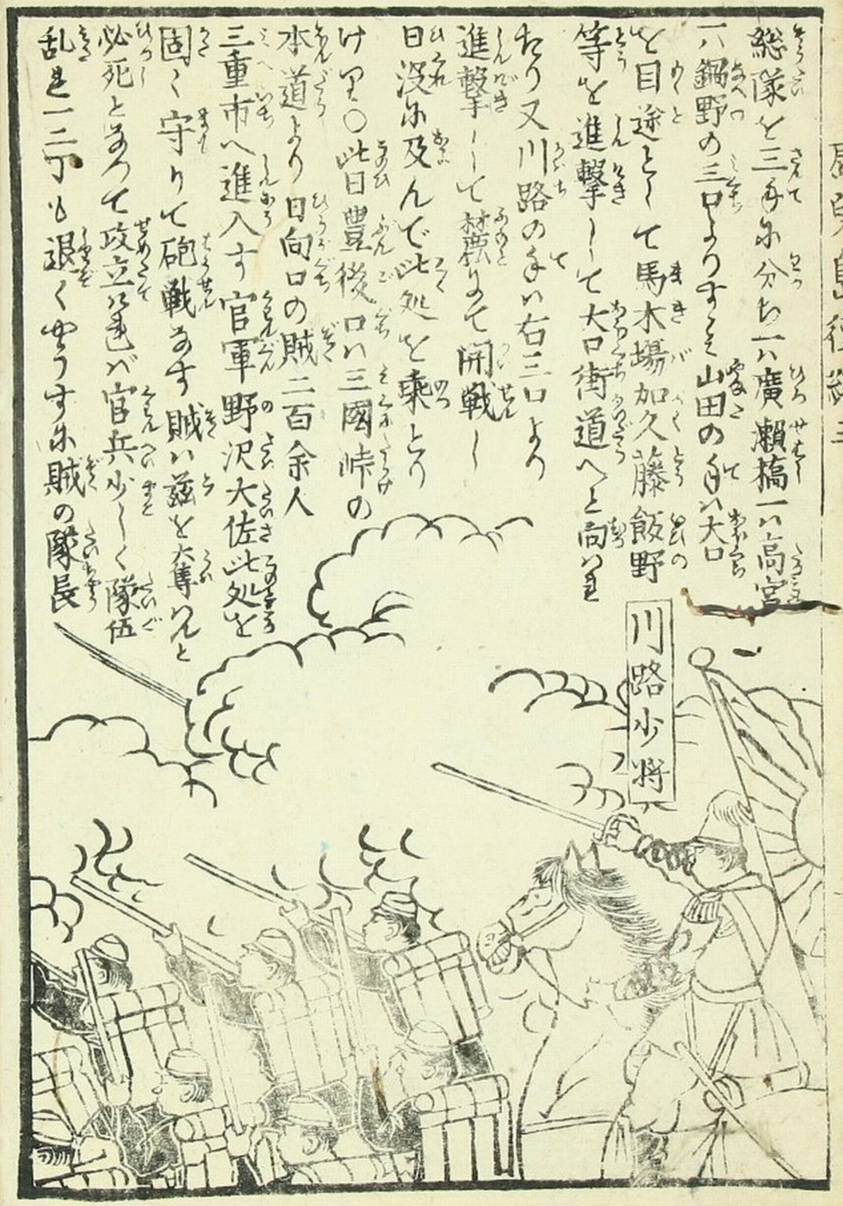
山田少將

薩軍四五百の兵胸壁ふ擁り固守せ官軍の大兵襲來する

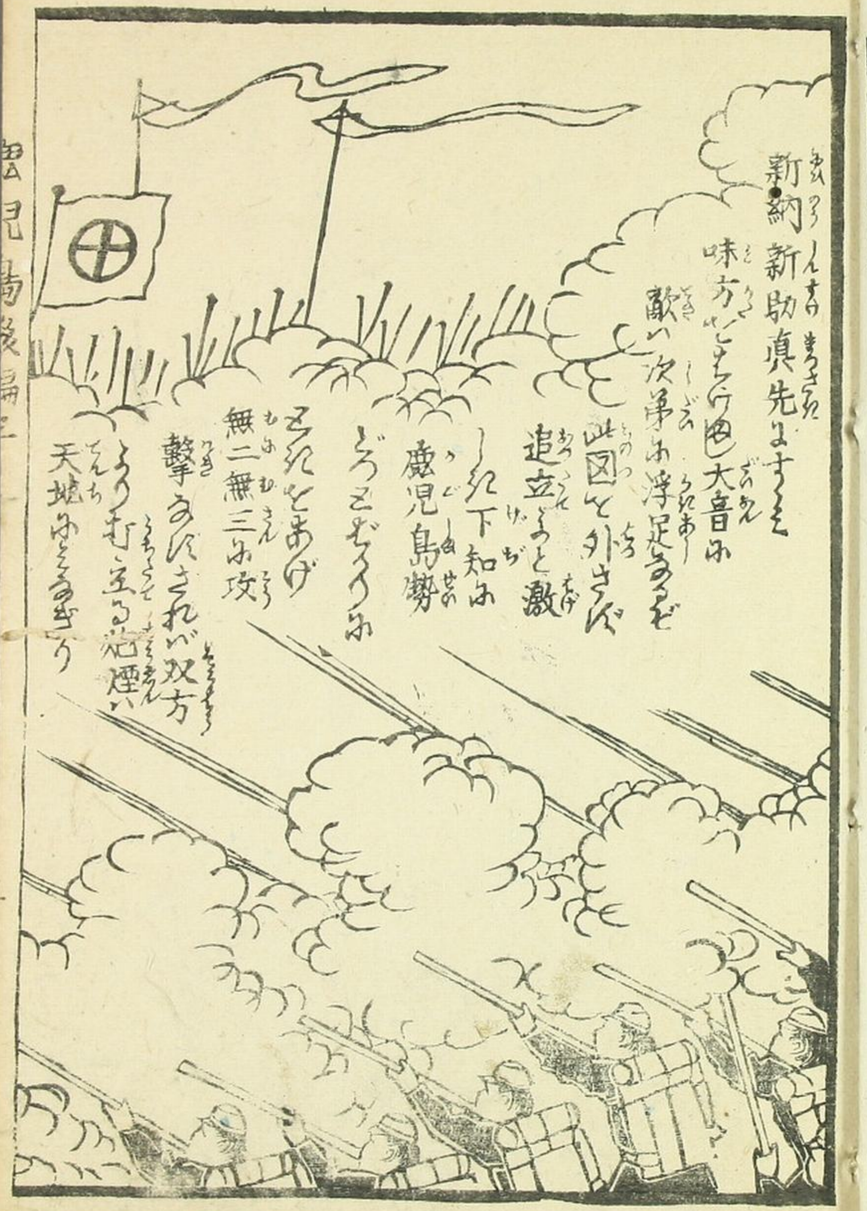
ゆ

茲ふ川路山田の兩少將ハ同十一日より薩州路へ進入して翌日時此地ふ人馬の労をやすめ川路の兵ハ出水を攻撃ん

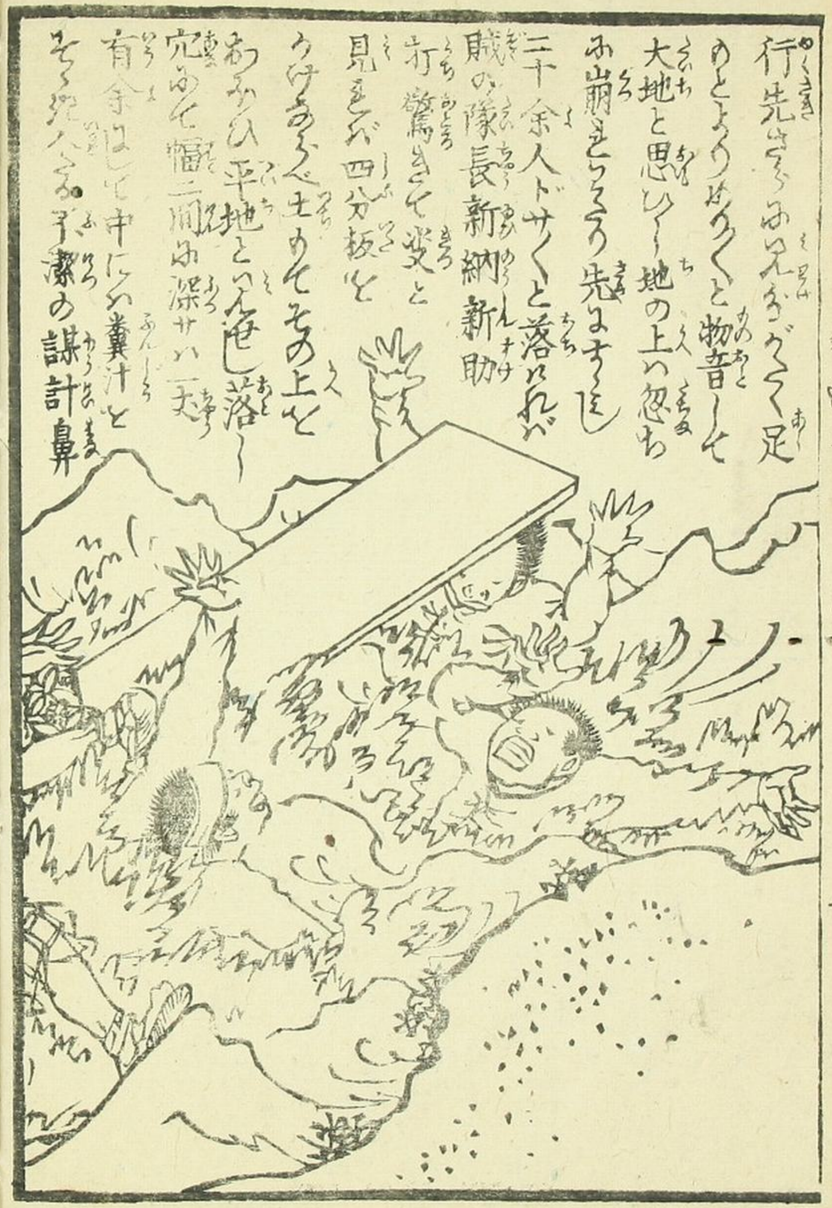
総隊と三手に分れ一ハ廣瀬橋一ハ高宮
八鍋野の三口へうすゝ山田の名ハ大口
と目途とゝて馬木場加久藤飯野
等を進撃ゝて大口街道へと向ふ



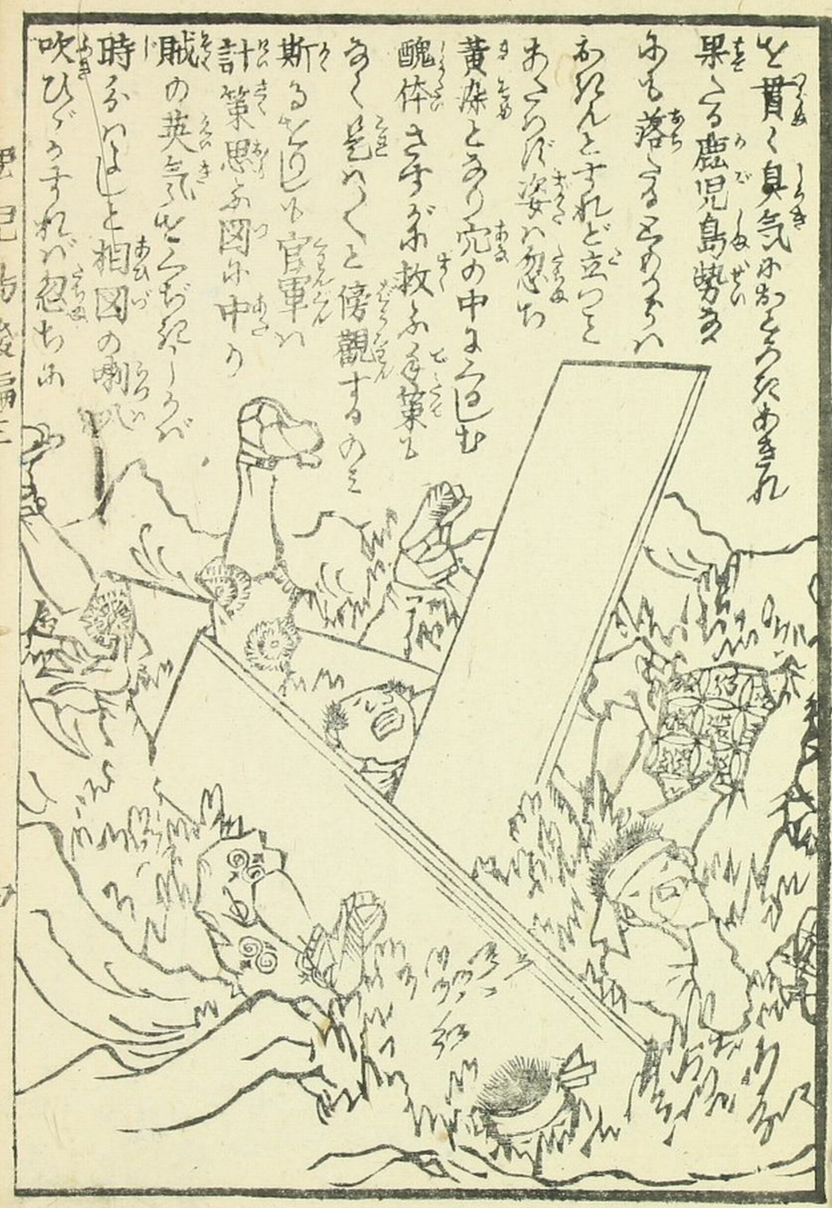
ちう又川路のまい右三口より
進撃ゝて禁りて開戦ゝ
日没ふ及んで此処を乗とり
けり○此日豊後口ハ三國峠の
水道より日向口の賊二百余人
三重市へ進入す官軍野沢大佐此処を
固く守りて砲戦あす賊ハ益と大事ゝと
必死とあつて攻立るゝ官兵少ゝく隊伍
乱れ一二丁も退くゆうすふ賊の隊長



行先きをあらそひ足
のとゝろかくと物音して
大地と思ひ〳〵地の上に忽ち
ゐ崩れたるを先きすゝむ
二十余人どさくと落ちれば
賊の隊長新納新助
打驚きて変と
見るゝ四分板を
うけあるゝ土をその上を
あるゝ平地と思ひ色落〳〵
穴の中間に雨は深サハ一丈
有余ばかり中に糞汁と
そゝ泥人ゝ。漆の謀計鼻

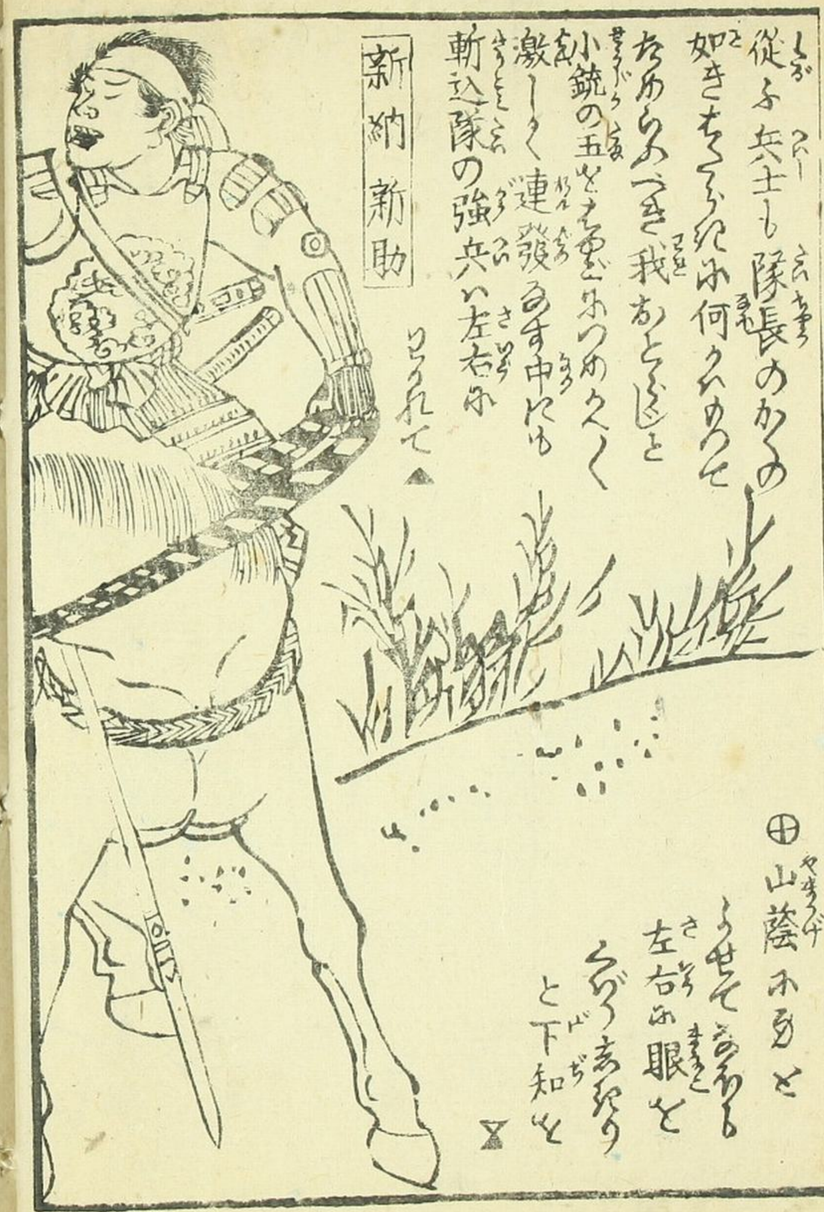


を貫く臭気ゆゑにあきれ
果てる鹿児島勢ゆ
ゆも落てるるゝもの
あるゝんとすれど立つて
あるゝらば安い忽ち
黄染とゝり穴の中より色も
醜体さすがに救ふ策も
なく見ゝくと傍観するのみ
斯るゝ官軍い
計策思ふ図ふ中り
賊の英気をくじ〳〵
時ふいはと相図の喇
吹ひゝらすれば忽ち



左右の樹木のあがりしうちまた
同じく〳〵喇叭を吹くるふ
賊いひしく仰天は
さてとて敵ふ伏兵
あり由断ありてハ一大
事なるべし敗北しあふ
ものと指令もいまく終ら
ぬうちも左右の
樹木のあがりしより
数十挺の小銃の
筒音高く撃
出せ玉煙りのうち
ふ薩児島勢二三十人

討死あるせ追ふ〻〻
薩兵も色めくまに新納
新兵衛〻〻ふつ〻〻
あがりあんぜら毫式の
筒先ふあらをと
るハ云ひ
一歩も
とあがるいで
歓味方の目と
さるさせんことなる
大刀ぬきぬぎ前後左右へ
馬のり手に〻〻ふ
力戦あチりどふ



従ふ兵士も隊長のかくの如きたくましき紀伊何久めつたたかふつき我あとゝと小銃の五ゝを手ぶ手ぶつめくく激しく連發する中にも斬込隊の強兵い左右ふ

新納新助

▲奮戦ゐ火水ふ

ゐるとたくましきれども賊い前と左右ふ敵をうけての防戦多り官軍方ハ繁茂したる樹木を少楯ふ炮撃し土俵をつんで仮の胸壁とし〜きり入る敵をふせぐあとに官兵死傷たくさんして賊い次弟ふ打立らるゝ筆をとゝせ〜討死ふ新納ゐ今ハい体つゝをたゞく息と安めとゝ

⊕山蔭ふ多と
らせて
左右ふ眼を
らゞく
と下知を

▼あす
何処より
ゐい一發の
弾丸不意
ふとゝ來り
新納が
服ざる

射ぬけ〳〵べ
何ものぞ
たゞ一ぐき
馬上ゆこ〳〵
すぐと落
それとなる
あり二陣の
隊長島津
五左エ門新納
ゆあらぬ
無双の勇士
先手の耻
辱をきて。

▲蹄ゆ蹄かゝ
むふのゆ拝
討縦横ゆ斬巡る
隊長と討
とその手の
兵士も
分外の

勇をあらら
とゝらるぬて
たく久ども
官軍のそ
厳重まれば
容易ゆやぶの
がくれれば残念
ありと歯ぐそ
せゝぐ又旋べき

島津五左エ門

勇ものゝ
すくも兵士を

がんと
兵士ゆ
下知を
つくつ
新納が
死骸を
取庁付
ゆ

ある形勢
数挺の小銃打
あゝ紀さん
五左エ門い指令の鎮
真向ゆ自ら敵中ゆ入近付

陣刀ひゝ抜き
▲

引き
日向路
ひゝ上
官兵
追ち
臼杵ゆ
此地ゆ
すて

一同三國嶺ふ引あげ山の中腹と絶頂ふ砲臺を築きいと厳重ふまもりる却て説田熊本鎮台司令長官種田少将の權妻なりし元東京日本橋辺のげい妓小勝といふる種田君と

芸妓小勝

こゝに熊本ふなりしが去明治九年十月同縣士族暴働の際種田君ふ無斬の死と遂られ小勝もその場ふ居合せる疵を受しゝ同縣下逼在し病院ふ

☒あるゝ〳〵入城して休戰ありしが一日の憂をとゞめ手をぐに修羅の一ぷく吸うんとせし処

入り療養を加へ漸く復たりしるとりうゝ鹿児島暴徒進入せし

☒ある小将の官員の家族方と共ふ城内へとりこめり終日砲声耳をつらかくら紀身のうく古々の安否とあんと暮すうるら東京巡査の何某なるものとれも☒これふとゝくる諭旨あるゝと

巡査隊何某

たるゝ人々薄煙り底と排ひし難渋と小勝が見る持合せる長崎たゝと紙ふひとつとゝる遣しるその ちんせるが かゝるて彼巡査何某い優し紀小勝心ゞゝと艶ある淡女よんのうの翌日とる

知と我身をわゞせるゝ武士の思ひ出ふかる婦人の一夜の情と受るるふ若干円の恩賞ふ

あのへど人目あるまじ一礼のべてその座を
去りしが空ふきまぎる哨煙ハ吹来る風ゆ
消失れど悪幕のやきふゆる火い
己がところふきへやとび
その夜ひそかに小勝が
国へ志のびゆくあるひの丈をもち
明て口説ところ引かへく
小勝が正しく自撰り
かへるを壮士が大舞発色
花美ゆ小袖とかり
きとくくく
勇戦ありいとまづなるも
次号にゆづりぬ

巡査何某

010190508019